ゴーリキーの自伝的作品における ヴォルガの印象の薄さについて

中　村　唯　史

マクシム・ゴーリキーはソ連時代、しばしば「プロレタリア文学の父」「ソ連文学の創設者」などと呼ばれ、文学史でも特権的な位置を与えられてきた。だが1890年代から1930年代という長期にわたって多面的な活動を展開し、複雑な軌跡を描いたこの人物をもっぱら作家として見た場合、かならずしも飛びぬけて傑出した才能というわけではなく、むしろ少なからず短所を備えていたことは、これまで比較的局外にあった研究者たちによって指摘されてきたとおりである。

短所として最も顕著なのはプロットの定型性と、人物や自然の描写の類型性だろう。これは嵐の海を飛び回る鳥を革命の告知者になぞらえた『海つばめの歌』（1901）のように、しばしば過度の寓意性にまで至っている。組織的工場労働者の活動とその親の世代の覚醒を描いた『母』（1906）は、国境を越えて広く読まれ、世界のプロレタリア文学の原型のひとつともいえる作品だが、後に建神論と呼ばれることになる思潮へと傾きはじめていた当時のゴーリキーによって、主人公親子や労働者たちが聖母子や使徒とのアナロジーのもとに造型されているとの指摘もある。(1)

もうひとつの短所は構想の弱さだ。これは特に長編小説において顕著で、ゴーリキーのそれがしばしばエピソードの単なる羅列であり、全編を貫くコンセプトを欠いていることは、作家に対して好意的だった批評家や研究者も認めているところである。

とはいえ、ゴーリキーを凡庸な文学者と見ることは、やはり正しくない。彼の人物論の鋭さには定評があり、たとえばトルストイを聖人視したり神格化したりする傾向が強かった1900年代に、この文豪が内に抱えていた「すべての肯定に対する否定」、「何によっても除去できない無限の絶望」、「もっとも深刻で険悪な虚無主義」を指摘した文章(2) は、無数に書かれたトルストイ論の白眉として、現在までくり返し引用・言及されている。ゴーリキーは概して想像力と構想力に欠けるきらいがある一方で、現実に遭遇した人やできごとに対する観察眼と洞察に優れた作家だった。

ゴーリキーの特色としてもうひとつ指摘できるのは、彼が世紀末から「銀の時代」にかけての文学者には稀なことに、かならずしも自立的な作品世界の構築を志向してはいなかったということである。思想史家のヒラリー・フィンクが指摘しているように、この時期のロシア文化においては、芸術と現実とを同一視しようとする思潮が主流だった。(3) たとえば「道標」派の思想家ベルジャーエフの「認識行為はまぎれもなく現実の行為であり、知識は実在

1　*Л. Спиридонова*. М. Горький: новый взгляд (М., ИМЛИ РАН, 2004) С. 64-89; *М. Агурский*. Великий еретик (Горький как религиозный мыслитель) // Вопросы философии, 1991. №8, С. 54-74; *П. Басинский*. Горький (М., Молодая гвардия, 2005), С. 341-348.

2　*М. Горький*. Лев Толстой // Собрание сочинений в 16 томах том 16 (М., Правда, 1979), С. 87-135.

3　Hilary L. Fink, *Bergson and Russian Modernism 1900-1930* (Northwestern university press, 1999), p. xv.

である」[4] という言葉に明確に表れているように、現実とその表象との差違を否定し、あるいはさらに表象をこそ現実を超克した、より実体的なものと認めようとする傾向が強かったのである。

ゴーリキーが、米国の研究者トーマス・セイフリドによって「言語実体論」と呼ばれたこの潮流[5] から完全に断絶していたわけではないけれども、しかし彼は概して、一般的な意味での「現実」を第一義的な実体と認めたうえで、その現実に言葉によってどこまで肉薄できるかにこそ心を砕いていた。彼の作中でしばしば出会う「人生のこの時期を、私は『主人』、『藪医者』、『二十六人の男と一人の女』などの短編のうちに素描している」[6] といったたぐいの記述は、現実と言説とを峻別し、前者を実体として認めるゴーリキーの基本的な立場のあらわれである。

したがって、ゴーリキーの優れた文学的達成が、『チェルカッシ』(1894)、『二十六人の男と一人の女』(1899) など初期の中短編、1910年代に書かれた長編『幼年時代』(1913) と『人々のなかで』(1916)、やはりほぼ同時期の連作『ルーシを巡りて』(1912-1913) など、主として自伝的な作品であるのは自然なことだ。これらの作品がゴーリキーの子供時代から青春期、とりわけ1888-1889年、1891-1892年の二度にわたる遍歴時の実際の体験や見聞に多くを拠っていることは、よく知られている。

ロシア文学者の松本忠司がゴーリキーの二度の遍歴の経路を整理した地図からは、後の作家が、1861年の農奴解放後、流動性の度を急速に高めていた社会のなかで生き延びるべく、仕事と居所を転々とした際に、ヴォルガ河を軸として移動していたことが見てとれる。[7] これは当時、中部ロシアの人と物資の流通が主として河川交通に拠っており、ゴーリキーが子供時代を過ごし、生活の基盤としていた街ニジニー・ノヴゴロドがその要衝だったためである。

けれども私たちが留意すべきは、この時期の遍歴に基づくゴーリキーの自伝的諸作品において、ヴォルガ河の存在感が希薄であるということの方だ。もちろんヴォルガの形象が作中にまったく現れていないというわけではない。むしろ、若き日のゴーリキー自身とおぼしき語り手が職と居所を変えようとするたびに、当然のこととして移動経路であるヴォルガ河への言及はなされているのだが、その記述が概して短く、そっけないのである。

このような自然描写はゴーリキーの作品において、かならずしも普通のことではない。彼は1923年11月のロマン・ロラン宛書簡のなかで、みずからを「人間については人間中心主義、自然描写においては擬人観的」[8] と呼んでいるが、これは作家として的確な自己定義である。ゴーリキーの作品中の自然は、プロットのレベルで大きな役割をはたすケースはあまり多くないが、しかし単なる背景というわけでもない。それは多くの場合、プロットのレベルで生きていく人物たちを包む空間として作中に現われ、彼らの内面と連動し、これに照応している。

---

4 *Николай Бердяев*. Об онтологической гносеологии // Вопросы философии и психологии. 1908, №93, С. 413-420.

5 Thomas Seifrid, *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930* (Cornell University, 2005).

6 *М. Горький*. Мои университеты // Собрание сочинений том 9, С. 331.

7 松本忠司『ゴーリキイ研究　第一部　作家への道』小樽商科大学人文研究叢書、1968年、194－195頁。

8 *К. Д. Муратова*. М. Горький на Капри 1911-1913 (Л., Наука, 1971) С. 262.

このようなゴーリキー的自然の典型例は、『イゼルギリ婆さん』(1894) 末尾の記述である。燃えさかる心臓を胸からえぐり出して掲げ、一族を豊かな地へと導いた後、力尽きた勇士ダンコの物語を、語り手がイセルギリ婆さんから聞き終えたときの、二人を取り囲む広野の描写は次のようなものだ。

> 老婆がこの美しい物語を語りおわった今、広野は恐ろしいほど静まりかえった。まるで広野までが、人々のために自分の心臓を燃やしてしまい、しかもそれに対して何の報いも求めずに死んでいった、あの勇士ダンコの心の気高さにすっかり打たれたかのようだった。[…] 広野は静かで暗かった。空を雨雲がものうげに、のろのろと這っていった……海は陰気に、もの悲しくざわめいていた。[9]

これは当時のロシア人にとってなお新開地だったベッサラビアの自然の描写である。対して、『幼年時代』、『人々のなかで』、『ルーシを巡りて』など、1910年に書かれた自伝的作品群のヴォルガ河の描写には、それがゴーリキー自身の原風景であるはずにもかかわらず、「私」の感情と連動したり、呼応したりする例は、あまり認められない。『人々のなかで』中のヴォルガ河畔風景の描写のひとつを見てみよう。

> 以前は、よくヴォルガの彼方を見ていると、何かとりわけ退屈になることがあった。牧場は叢林の黒ずんだ補布をあてて平らに横たわっている。牧場の端には森のぎざぎざになった黒い壁があり、牧場の上の方には濁った冷たい青空がある。地上は空っぽで、孤独だ。心臓もまた空になって、静かな憂愁がそれをくすぐる。すべての欲望が消えていく。考えることは — なんにもない。眼をつむりたくなる。心の滅入るような空虚は、心臓からそこにあるすべてを吸い取るけれども、なにひとつ約束してくれはしない。[10]

これは自伝的作品においてヴォルガの形象が前景化している例外的な事例だが、その自然は「私」と断絶している。ヴォルガの遠景と「私」の心が「空虚」において連動しているという言いかたもできるかもしれないが、素直に読めば「私」の心が閉塞しており、自然の側も何ひとつ訴えかけてこないということである。そして『人々のなかで』の他の箇所では、多くの場合、ヴォルガは「私」の移動の単なる通過点という以上ではない。

作品の主要な舞台であるにもかかわらず、ヴォルガの印象が希薄というこの傾向が最も顕著なのは、1912年 4 月から翌年の 7 月にかけて諸誌に発表され、1915年に単行本として刊行された10の短編から成る連作『ルーシを巡りて』である。[11] すべての短編が1880年代末と

---

9 *М. Горький*. Старуха Изергтиль // Собрание сочинений том 1, С. 88. 日本語訳は上田進・横田瑞穂訳（岩波文庫『ゴーリキー短編集（1966年）』所収）を参照し、著者一部改変。

10 *М. Горький*. В людях // Собрание сочинений том 9, С. 132. 日本語訳は湯浅芳子訳（『河出書房世界文学全集24（1956年）』所収）を参照し、著者一部改変。

11 現行の全集や選集では、その後1915年11月から1917年10月までに発表された18編を加えた1923年版の内容を踏襲することが多いが、最初の10編と増補18編とでは、1 編あたりの分量と傾向に大きな相違がある。本稿では、ゴーリキーの当初の意図を反映していると思われる前者 — 1915年

1890年代初めの二度の遍歴時の体験に基づいているこの連作において、ヴォルガの存在感はきわめて薄い。ひとつには個々の短編の自立性が高い連作というジャンルのせいでもあろうが、個々の短編の舞台となっている諸々の土地のあいだの移動を、「私」はヴォルガやその支流に沿って行っているはずなのに、そのことは作中にほとんど出てこないのである。

連作『ルーシを巡りて』は、作品相互を結びつける糸を欠いているわけだが、個々の作品には印象深い佳編が多い。たとえば第7編『女』は、二度目の遍歴でゴーリキーがヴォルガをアストラハンまで下り、その後向かった北コーカサスで一時拘留された際の体験に基づいているというが[12]、忘れがたい小品である。

「私」がぶち込まれた雑居房には、男女の別なく他にも数名が入れられていた。夜になり、みな寝静まっても眠ることができず、横になっている「私」の耳に、別の男に性愛を迫る女のささやき声が聞こえてくる。迫られた男の方は、眠っているとはいえ他の人間もいるそばで、見知らぬ女と関係を持つことを拒む。雑居房は結局なにごともなく朝を迎える。

翌日、ささいなことで、このタチヤーナという女と言い争いになった「私」は、思わず昨夜のことを口に出して侮辱しようとする。ところがタチヤーナは恥じるどころか、ほとんど尊厳をもって、なぜそれが自分の人生にとって必要不可欠なのかを詳しく説明しはじめる。

> あたしはもう全部もう考えてあるのさ、わかってるんだ！今に見てな、あたしはいい男とめぐり合うんだから。そして、そいつとあたしは土地を手に入れるのさ、ノーヴィー・アフォンの辺りにね。あそこにはいたことがあるから、よく知ってるんだ。あたしたちはじょうずに百姓をやっていく。庭を作って、野菜畑だって麦畑だって、暮らすのに必要なものは何だって作る。〈中略〉あたしたちがうまくやっていれば、そのうち他の人らも集まってくるさ。そしたらあたしたちはもう古顔だからね、みんなから尊敬される！そうやって、少しずつ新しい村ができていってさ、いい場所になるよ。旦那は長老に選ばれる、そしたらあたしは地主さまみたいに磨き上げてやるんだ。庭では子供たちが遊んでてさ、あずまやなんかも建ってて さ…。そうさ、立派に生きられるんだ！〈中略〉いい暮らしがしたいもんだね…ああ！うまく行きますように…。で、そのためにまず必要なものといったら、それは当然、男じゃないかね…」[13]

革命期の女性解放論者として著名なコロンタイは論文「新しい女性」のなかで、このタチヤーナを新しい社会的現象、「みずからの個性を主張し、国家と家族と社会における女性の全面的な隷属に抗議し、自分の権利のために闘うヒロインの新しいタイプ」であると評価したという。[14] だが、タチヤーナははたして、そのような新しい人間だろうか。

あきらかに彼女は、農奴解放以降の社会・経済の急速な変動の過程で困窮の度を深めた農村から逃れ出て来た流民である。たしかに彼女は新開地をめざしているけれども、そこで営もうとしている将来の生活設計には、新時代の要素は認められない。彼女の計画は、自分の

版所収の短編のみを対象として、以下に論を進める。

12 См.: М. Горький. Собрание сочинений том 7, С. 377-379.

13 *М. Горький*. Женщина // Собрание сочинений том 7, С. 113-114. 以下、『ルーシを巡りて』からの日本語訳は著者による。

14 М. Горький. Полное собрание сочинений. том 14, (М., Наука, 1972), С. 603.

土地を持ち、閉鎖的な自給自足の生活をいとなむという、ロシア農民の古来の夢にほかならない。作者ゴーリキーは、そのような美しい伝統的な夢が資本主義化しつつある社会においては実現されえないことを、数年後におそらく革命運動に関係したかどで再び獄に入った「私」が、タチヤーナもまた獄中にあり、その罪状が贋金に関係したものであることを知るという、苦い後日譚によって示唆して作品を閉じている。

ところで、やはり二度目の遍歴の際に黒海沿岸の街ニコラエフで知り合った流浪者の話を基にして書かれたという初期短編『チェルカッシ』[15] の主人公 — 流浪のはてに今は黒海沿岸で略奪や窃盗を業としている男 — が、農村から出てきたばかりのにわかじたての手下に、自分でも思いがけなく熱く語る言葉が、タチヤーナのそれによく似ているのは、興味深いことだ。

> 「百姓の暮らしで、いちばん大切なものは、なあ兄弟、そりゃ自由だ！いいか、お前は自分で主人なんだぜ。お前は自分の家をもっている。そりゃ二束三文のものかもしれねえが、それでもやっぱり自分のものだ。それからお前は自分の土地をもっている。猫の額ほどかもしれねえが、やっぱりそれも自分のだ！その土地の上では、お前は王様なんだ！…そして、お前はちゃんとした体面をそなえられる。だからお前は、誰からだって尊敬される権利があるんだ…そうじゃねえか？」[16]

たしかにチェルカッシはタチヤーナと違って、ふたたび百姓の暮らしをしようとは考えない。だが、帰村を夢見る手下に金品をすべて与えてしまうのは、「雪がとけたばかりのころの大地や、すきかえされたばかりの大地、秋蒔麦が青い絹をしきつめたようにきれいに芽を出した頃の大地の、むんむんするような匂い」の記憶を呼び起こされたからである。自分がかつて見捨てざるをえなかった農村を思うとき、彼は自分が「そのような世界秩序からすっかり切りはなされ、放りだされてしまって、いまはまったく孤独の身であることを感じ」ないわけにはいかない。[17]

チェルカッシはソ連期の公式的な批評において、不公平な社会に対する反抗的人間の形象として、しばしば高く評価されてきた。けれども彼もまた新しい価値の体現者ではない。「彼の血管を流れる血潮はそういう世界［農村社会］で培われた」[18] ものであり、彼の盗賊行為は新しい価値観に基づく反抗ではなく、物品と金の強奪という、商品経済の枠内でのアウトローという以上ではない。

テキストを読むかぎり、タチヤーナもチェルカッシも「新しい人間」の形象とは言いがたい。それはコロンタイのような批評家によって、事後的にゴーリキーのテキストに付加され、流通するようになったイメージといわなければならない。作者はタチヤーナの保守性やチェルカッシの限界を、社会主義イデオロギーの立場から定位し、評価しているのではない。激動する時代に翻弄され、故郷を出て新しい村を見いだすこともなく流浪する人々 — その元

---

15 См.: М. Горький. Собрание сочинений том 1, С. 415-416.
16 *М. Горький.*Челкаш // Там же, С. 140. 上田進・横田瑞穂訳参照、著者一部改変。
17 Там же, С. 141.
18 Там же.

型は若きゴーリキーが19世紀末の遍歴のなかで実際に出会った人々だ ― を凝視し、提示しているだけなのである。

たしかに『女』のなかで、語り手とタチヤーナが心と肩を寄せ合い、夜明けを迎える場面は比類なく叙情的で美しい。

> たがいに固く身を寄せ合いながら、私たちはまるで漂っているようだった。夜から解き放たれた白い百姓小屋や、銀色の木々や、赤い教会や、たっぷりと露をふくんだ大地が、輝きながらこちらに向かって流れてくる。／太陽が昇ると、私たちの頭上には、数千羽の白い鳥のように、透明な雲の群が流れていた。／タチヤーナは私をつつきながら、ささやいた。「一人で放浪しながら、あんたは何を考えてきたのさ」[19]

だがタチヤーナと共感し合っているのは、あくまでも語り手 ― やや強引に同一視するなら、1890年代初頭のゴーリキーである。一方、『女』という小説の作者（1910年代のゴーリキー）は、タチヤーナを「新しい女性」として評価しているのではなく、彼女の牧歌的だが旧弊な夢を提示しているだけなのだ。もちろんその視線は冷たく突き放すのではなく、むしろきわめて温かいが、それはコロンタイのいうように彼女が「新しい女性」だからではない。

『ルーシを巡りて』のなかで、社会変動の過程で零落していく人間を描いて印象深いもうひとつの作品は、ヴォルガ水域オカ河畔の街マムリンを舞台とする第2編『グービン』である。「私」は街の居酒屋で、グービンという男と出会い、あるお屋敷の庭の井戸の泥さらいの仕事に誘われる。しだいにわかってきたのは、この屋敷がかつてグービン自身の所有だったが、没落の末に女商人によって巻き上げられたということだった。今は屋敷の主人である女商人とグービンとのちぐはぐな会話を耳にしつつ、私はやがて井戸のなかに降りていく。

暗い井戸の底から目を上げた「私」は、上空に昼の星を見いだす。

> 井戸の底の暗い円が燃えつきた空を隠していて、私にはその星々は少しばかり見えるだけだった。だが空に太陽が燃えていると知りながら、星々を目にしているのは、なんとぶきみで、かつ心地よいことだったろう。私はずっと上を見ていた ― 首が痛み、腰がうずき、後頭部に鉛が入っているみたいだったが、これら昼の星々を見ていたくて、目をそらすことができないのだ。昼の星のせいで、空全体が新しいものに見えた。太陽が空で孤独でないと知るのは快いことだった。[20]

地上ではグービンと女主人が金と欲望にまみれた会話をしているが、井戸の底に立った「私」の心は、そのような地上を通り過ぎて、天空に直接見いだした「昼の星」によって、浄化される。昼の星のかすかな輝きは、地上の陰鬱な生活を通過して、救済のように語り手の心に射しこんでくる。

概して『グービン』は空の印象が強い短編だ。天の川や火星や月や太陽、そして昼の星、あるいは雲の動きがしばしば描かれ、人々が地上で営んでいる生活と鋭い対照をなしている。

---

19 *М. Горький*. Женщина // Собрание сочинений том 7, С. 115.
20 *М. Горький*. Губин // Собрание сочинений том 7, С. 51.

語り手は空を見上げることで、現状を克服していく意志を得るかのようだ。この短編において空は、先に指摘したような意味での、ゴーリキー的な自然として表れている。

その一方、マムリンの街がオカ河畔に位置することの言及はあるものの、作中でオカ河はほとんど何の役割もはたしてはいない。『ルーシを巡りて』全編の風景描写において垂直軸が水平軸に優越しているわけでは必ずしもないが、河の印象の希薄さは、この短編連作の一貫した特徴であるといって良い。たしかに、初春のニジニー・ノヴゴロドを舞台として、ヴォルガ河の雪どけ水の氾濫で生命を脅かされた人々が、知恵でもって危機を克服する『氷の流れ』のような作品もあるが、そこではヴォルガは恐ろしい自然の脅威であり、しかし人間によって最後には克服されるのである。また『汽船にて』は、ヴォルガ河を航行している汽船が舞台の短編だが、河自体は語り手の心理の変化に従属する背景という以上ではない。河は、天体のような救済や浄化の契機たりえていないのである。

河の存在感の希薄さが『ルーシを巡りて』という連作で際立つのは、「ルーシ」というロシアの古名と「母なるヴォルガ」とのつながりが連想されるのに、その期待が裏切られるからでもあろう。『ルーシを巡りて』諸編が書かれた1910年代前半は、第一次革命破綻後の危機意識を背景に、復古的・回顧的な雰囲気が濃厚な時期だった。したがってゴーリキーが題名に「ルーシ」を用いたのはあきらかに時代の影響だが、本来「ルーシ」を巡るのに「母なるヴォルガ」ほど適した装置はないのであり、しかも遍歴時のゴーリキーが実際にそうしていたにもかかわらず、ヴォルガはこの連作において影が薄いのである。なぜだろうか。

ゴーリキーの小説における語り手の視点は、一貫して内在的である。語り手のまなざしは遭遇した人間や事件に密着して、その経緯を語っていくが、ゴーリキーという作者においては、できごとの意味を総括する俯瞰的な視点が希薄なのである。

地域の特殊性にしろ、「ルーシ」にしろ、それは一度対象から距離を置いて、いわばできごとの外部から全貌を俯瞰するのでないかぎり、意識化し、表象できないものだ。たとえば「ヴォルガ」即ち「ロシアの母なる河」という定型が確立するためには、ヴォルガから一度離れてロシア全体を視野に収め、そのうえでロシアの内にヴォルガを意味づけるような視点が不可欠である。ヴォルガに密着し、その圏内にあり続ける視点にとっては、河はあくまでも交通や漁労など生活の手段のままである。

ナショナリズムをも含む特殊性や地域性に対する意識が、外部からの俯瞰的な視点なしには成立しないことを、『人々のなかで』は鮮やかに示している。「私」が少年時代、ヴォルガの風景を「空虚」としか認識していなかったことにはすでに言及したが、「今では、ヴォルガ沿いの遠景をながめても、そこに空虚はないと知る」[21] ようになったのは、「私」が新聞雑誌を読みあさるようになって以降のことだというのである。

『人々のなかで』は、「私」がヴォルガの遠景を眺めながら「この大地全体にも、また自分自身にも良い足蹴を与えてやりたい」[22] と思い、ニジニー・ノヴゴロドからカザンへの移住を決意する場面で終わるが、このようにヴォルガが別の生活への志向を呼び覚ます装置として機能するようになったのは、「私」が世界全体についての知識を得、その内に自分の現

21 *М. Горький*. В людях // Собрание сочинений том 9, С. 132.
22 Там же, С. 304.

在の生活圏をも位置づけることができるようになったからである。
「ヴォルガ」を「ルーシ」の軸として表象することは、それこそロシアの過去の歴史を俯瞰するような知識を持った人間でなければ不可能である。いうまでもなくゴーリキーは執筆当時、そのような知識をすでに持っていたのだが、『ルーシを巡りて』諸編では、過去の実際の体験に基づいているせいもあってか、人物やできごとに密着する視点が圧倒的に優越しており、俯瞰的な視点はほとんど現れない。つまり個々の作品を全体へと結びつける視点が弱いのである。ルーシ遍歴の軸であるべきヴォルガの存在感が希薄な理由もここにある。

これは、インテリゲンツィア出身ではないゴーリキーについて、しばしば言われてきたような、資質や教養の問題ではない。『ルーシを巡りて』の意図を編集者に説明した書簡のなかで、ゴーリキーは題名を『ルーシ。通過者の印象』とすることを提案した上で、次のように説明している。

> 私は「旅人 прохожий」ではなく「通過者 проходящий」という言葉を、わざと使っているのです。思うに、旅人は自分の足跡を残さないが、通過者はある程度活動的で、人生の印象を汲みとるだけではなく、何か特定のものを意識的に作りだしたりもする人物なのです。[23]

「生の印象を汲みとるだけ」の完全なる観察者の語り、純粋に第三者的な語りは、傍観者的で俯瞰的な視点からの語りだが、ゴーリキーは語り手に、そのような「客観的な」観察者の視点を付与しようとはしなかったのである。

そもそも過去の自分の体験を振り返ることは、能動的な生の次元にあるのではなく、審美的な観照にほかならない。自分の経験を小説にすることは本質的に美的な営為なのであり、ゴーリキーも作者としては淡々と自分の生の経験を作品へと昇華させているが、作中人物であり、遍歴時のゴーリキーの位相に等しい語り手は、観照的という以上に能動的であり、できごとや人物に対して俯瞰的ではなく内在的な視点に立っているのである。

くり返すが、これは資質や教養の問題ではなく、世界観・人間観の問題である。ゴーリキーは俯瞰的な視点として社会主義の価値観を有していたけれども、文学的に優れた作品においては、その価値観は対象と有機的な関係を切り結んでいない。ゴーリキーの作品はときにあからさまに図式的だが、ソ連期の『私の大学』（1922）などを除いて、自伝的作品の諸要素（彼の過去の体験）は、社会主義イデオロギーという彼の図式の網の目からこぼれ落ちている。

復古的な風潮の強かった時期に書かれた『ルーシを巡りて』の場合には、題名による俯瞰的な価値観の導入が図られたが、短編連作というジャンルの問題もあり、非俯瞰的な立場からの語りだったためもあって、その意図は失敗に終わっている。作品と作品、場所と場所とを結んでいるはずのヴォルガほかの河の形象が、作中でなんら象徴的な機能を付与されていないことは、『ルーシを巡りて』における俯瞰的・図式的な価値観の欠如を示しているのである。

23　*М. Горький*. Собрание сочинений том 7, С. 364 による。